

# Hannover Messe Digital Days

## ～オンラインセッションにみる 欧州デジタルモノづくりの動向

7月14、15日にドイツメッセ主催のオンラインイベント「Hannover Messe Digital Days」が開催された。日刊工業新聞社のモノづくり日本会議では、海外のデジタルモノづくりの動向に詳しい(株)東芝 デジタルイノベーションテクノロジーセンターの八木秀規氏に、同イベントについてモノづくり日本会議会員向けのレポートを執筆してもらった。以下にその全文を掲載する。

これまでの Hannover Messe はドイツ・ハノーバの国際見本市会場で毎年4月に開催されていた世界最大規模の産業展示博覧会であるが、2020年はコロナ禍の影響のため4月の見本市会場の開催は中止となった。それに代わるイベントとして今回初めてオンライン形式で開催されたものが Hannover Messe Digital Days である。オンライン上に仮想的な会場が5つ用意され最大5つのセッションが同時に講演される形式で開催され、ライブではその中の1つの会場を聴講できる仕組みとなっている（写真1）。ライブで聴講できなかったほかの仮想会場のセッションは後からオンデマンドで視聴可能となっている。セッションは全部で100以上用意されているが、本報告ではその中から主に製造領域に関係するキーノートや各企業・団体による講演内容から、個社の個別製品ではなくビジョンや戦略の視点でのトピックをピックアップしている。

### 製造領域とIT領域への投資を継続

初日のキーノートでは、ヨーロッパ議会の Rei-

nhard Butiokofer 氏、Beckhoff Automation 社の Gerd Hoppe 氏、Pepperl + Fuchs 社の Gunter Kegal 博士、Festo 社の Frank Melzer 博士、ドイツ人工知能研究センターの Martin Ruskowski 博士によるデジタル化による産業変革についての議論がおこなわれた。ドイツにおいてデジタル化への取り組みはすでに10年以上継続しており、RAMI 4.0 (Reference Architecture for Manufacturing Industrie 4.0) の定義などを行ってきているが、



写真1 Hannover Messe Digital Days での登壇の様相（ドイツメッセ提供）